量的研究家は質的データ分析法をどのように学ぶか？

How do quantitive researchers learn qualitative data analyze methods ?

林　　智　幸

心理学は実証的な研究方法を重視する。従来の心理学研究においては実証的研究方法は「量的研究法」を意味していた。すなわち，数量的に測定された量的データを収集し，そのデータに対して統計解析法を行っていた。しかしここ数年，このような量的研究法とは異なる「質的研究法」が急激に広まってきた。本稿では，量的研究法に慣れている心理学者が質的研究法（特に質的データ分析法）を学ぶ際の注意点を述べ，そのガイダンスを試みる。

1．質的研究法とは何か？

質的研究法に関する解説書がここ数年で多数出版されており，あきらかに「質的研究ブーム」（佐藤，2008）が起きている。佐藤（2008）によると，質的研究に関するキーワードをタイトルないし副題に含む書籍は2008年３月時点で100点以上にのぼり，質的研究法の初学者はどれを選択すれば良いか迷うほどの状況となっている。そのような最近注目されている質的研究法とは何か。例えば，マクレオッド（2007）は「質的研究は，世界がどのように構成されているのかについての理解を深めることを，その第１の目的としている」という抽象的な定義を述べているが，初学者にとって理解しやすいものではない。初学者には，より実践的，手続き的な観点からの定義の方が分かりやすく，実際多くの解説書では「データの種類」や「研究態度」による操作的定義を紹介しているものが多い。ここでは「データの種類」からの定義を行う。

心理学で分析対象とされるデータは「量的／質的」の大区分が可能である。量的データとは数量的に測定されるデータであり，質的データとは「ことば」を代表とする非数量的に測定されるデータである。例えば，あるイベント参加者の感情を調べるデータを収集する場合，量的データであれば「喜び得点は10点満点で幾つになりますか？　怒り得点は？　悲しみ得点は？」として，質的データであれば「その時のあなたの感情を自由に報告してください」として測定される。そして，このデータを起点に研究法は次のように整理ができる。データに対する行為として「収集／分析」の２種類があり，これを先の「量的／質的」データと組み合わせると，データ収集行為として「量的データ収集」と「質的データ収集」，データ分析行為として「量的データ分析」と「質的データ分析」の４行為が導かれる。量的研究法あるいは質的研究法はこの４行為の組合せから説明でき，また初学者にとってもこの説明は分かりやすい（パンチ，2005）。

組合せから研究法を類型化すると次のようになる。（１）「量的研究法」は，量的データを収集し，そのデータに対して量的データ分析（統計解析法）を行う一連の方法論である。（２）「質的研究法」

は，質的データを収集し，そのデータに対して質的データ分析を行う一連の方法論と定義される。ここまでの類型は良いとして，他の類型には注意を要する。（3）質的データを収集し，そのデータを量的データとして加工し，量的データ分析するという方法論もある。この方法論は量的研究法と質的研究法のいずれに分類するか意見が定まっていない。ウィリッグ (2003) によると，「質的研究（qualitative research)」は，オープン・エンドで帰納的な研究を行う「大文字のQ」と，非数量的データの収集技法を仮説演繹的研究デザインに組み込んだ「小文字のq」とに分類される。この分類は後述する「研究態度」と関連があるが，（2）で紹介した純粋な質的研究法は「Q」に相当し，（3）で紹介している方法論は「q」と相当し，データ分析の観点から「量的研究法」に分類すべきである。（4）逆に，収集された量的データを質的データに加工して，質的データ分析を行うという組合せの方法論が考えられる。しかし，量的／質的データの互換性は一方向的であり，質的から量的への変換は可能でも，逆は不可能であるため，この方法論は成立しない。

2. 質的研究法を学ぶ意義は？

そもそも量的研究法を十分に使いこなせる研究者が質的研究法を学ぶ意義はあるのか。研究者は通常大学教員として働いているが，教員は自分の専門領域だけではなくより広い領域を教えることが求められる。そのため，心理学教員は「質的研究ブーム」に対応して，学生に伝統的な量的研究法だけでなく（そのレベルはともかく）質的研究法を指導をする必要がある。また，大学教員ではない，純粋な研究者であっても質的研究法を学ぶ意義はある。研究という営みが，所属する研究者コミュニティにおける共同作業によって知識の蓄積が行われるとするならば，研究者は他者の研究報告を参考にして研究を行うことになる。当然ながら研究報告は，報告者が必要とする方法論が採用されており，中には質的研究法を採用した報告書も存在し，これらの報告書を適切に解読・評価できなければならない。よって自らが質的研究法を実際に採用しなくとも，報告書を理解できる程度には学ぶ必要がある。

このような消極的な理由ではなく，積極的な理由も挙げられる。量的研究法と質的研究法では研究目的や分析対象の特性が異なり，量的研究法だけを採用する者は質的研究法の分析対象を検討できない。これは「研究態度」に関する問題である。行為には意図が含まれるが，研究行為における具体的意図は研究態度，研究者の認識論が関係している。心理学研究者が採用している認識論は幾種類もあるが，量的研究家（量的研究法を採用する研究者）のほとんどは実証主義を採用しているのに対して，質的研究家の採用する認識論として象徴主義的相互作用論やエスノメソドロジーなど幾種類も挙げられる。ただし，質的研究法を支える認識論には共通する4つの特徴が指摘されている（フリック,2002)。

質的研究法に共通する4つの特徴とは次の通り。（1）認識論的原則としての理解:質的研究では研究される現象や出来事を内側から理解すること目指す。この場合に理解されるものとは，一人ないし複数の主体のものの見方であることもあれば，社会状況の進行や，ある進行に関連した文化的・

社会的規則のこともある。（2）出発点としての事例再構築:比較や一般化をする前に，個別の事例をある程度の一貫性を持って再構成することである。例えば，まず一つの主観的理論，単独の会話，個別の事例を再構成し，それから他の事例の再構成へと進み，そして再構成の結果を比較しての類型論を形成するというやり方である。（3）基礎としての現実構築:再構成された事例や類型の中には，様々なレベルの現実の構築が含まれている。質的研究で研究される現実とは所与の現実ではなく，様々な「行為者（人物・相互行為・意味構造など）」によって構成された現実なのである。（4）実証的資料としてのテクスト：事例を再構成する過程で，実証的分析の対象となるテクストが生み出され，テクストが再構成と解釈の基礎となる。

一方，量的研究法の認識論である実証主義は，世界（物・出来事・現象）とそれに対する知覚や理解の間に直接的な関係があるとみなす（ウィリッグ，2003)。論理実証主義者は，「私たちの外の世界」を記述したり，理解することが可能だと信じる「真理の対応理論」を採用する。研究目標は，客観的知識を生み出すことであり，しかも，「外」からの観察に基づき，研究者の個人的な関わりや偏った興味が含まれない，そのような認識が可能であるとする。このように「事実の客観的証明」を重視する量的研究法に慣れている者からすれば，「事例の『行為者からの』主観的理解」を重視する質的研究法は全く異質な研究方法論となる。量的研究家は常に現実世界がどのようになっているかを問題にして，人間の持つ意味世界に対する適切なアプローチを知らない。ゆえに内面的な意味世界を調べるためには質的研究法を学ぶ必要がある。

3. 代表的な質的データ分析法とは？

研究とは証拠データの分析を通して自分の意見を発見・確立している行為である以上，データ分析の重要度は高いため，以降はデータ分析法に焦点を絞る。「量的データ分析（統計解析法)」として多数の分析法が開発されている。記述統計法，t検定，相関分析，分散分析，多重比較，重回帰分析，因子分析，χ^2検定，連関分析，相関比分析などは代表的分析法である。同様に「質的データ分析」にも多数の分析法が提唱されており，その代表的分析法を紹介する。心理学研究に普及している「質的データ分析法」はそもそも社会学分野で使用されたものがほとんどである。ゆえに質的データ分析法の概観とは社会学研究法の概観とほぼ等しい。

社会学の父の特定化には色々な議論があるが,DurkheimとWeberの二人が社会学の確立に果たした役割は大きい（本間・光吉・田野崎・塩原,1988)。しかし彼らは同じ社会学者であっても非常に対照的である。Durkheimは社会を超個人的実在な社会的事実として捉えて，この社会的事実を機能の概念を使い（機能主義)，実証的に研究を進めるべきだと主張した（実証主義)。Weberは社会は究極的に個人の行為により結合したものであり，その行為の理解を中心に研究を進めるべきだと主張した（理解主義)。二人が主張する実証主義と理解主義の対立は，社会学の根底に流れ続き，社会学の活躍の舞台がアメリカに移っても続いていくことになる。

20世紀，二つの世界大戦をはさんでアメリカ社会学をリードしたのはCicago大学の研究者集団

Cicago学派である。都市社会学を主要な研究テーマとして，エスノグラフィー（ethnography）的研究法を駆使して研究を進めた。エスノグラフィーとは，異文化の人々の生活を現地の人々の視点から理解することを通して文化を記述するための手法として開発されたものであり，元々は文化人類学の学問分野で開発されたものである(柴山,2006)。また人々が生活する現場(field)に赴いてデータを取ること（work）から，「フィールドワーク」とも呼ばれる。「生活を現地の人々の視点から理解する」この研究法はWeberの理解主義の影響を受けており質的研究法の源流ともいる。また，後述する象徴主義的相互作用論はこの学派から提唱されている。

第二次世界大戦後の社会学界はCicago学派の影響から離れ大きく変わった。大きな動きの一つは実証主義的な量的研究法が急速に普及したことが挙げられる。第二次世界大戦後に大きく勢力を伸ばしたColombia大学の研究者は，大戦中に質問紙調査法や内容分析などの量的研究法を採用した研究を行ったが，それが戦争に役立ち，実用的な研究を生み出す研究法として広まっていった。別の大きな動きとして理論重視の社会学研究が広まったことが挙げられる。Harvard大学の機能主義者ParsonsによるAGIL図式に基づく包括理論が普及,研究者の考案する理論が妥当かを調べる研究法が注目された。結局，仮説（理論）検証的な実証的な量的研究法が急激に広まっていった。この二つの動き，実証主義と機能主義はいずれもDurkheimの社会学の強い影響を受けている。

こうした仮説検証型の量的研究法や機能主義的包括理論に対する批判が1960年代頃に登場した（木下,2003)。仮説検証型の量的研究法への批判として，本当に調べたい理論は非常に包括的であるのに対して，実際にデータを使って検討する仮説は非常に小さく大きなズレが指摘された。Parsonsの機能主義的包括理論に対しては，理解主義の流れを汲む，いわゆる意味学派と総称される多くの理論的立場からの批判がなされた。例えばCicago学派が生み出した象徴主義的相互作用論による批判で，これを具体化したグラウンデッド･セオリー･アプローチ（Grounded theory approach,以下GTA）が挙げられる。GTAとは，質的研究法を重視するStraussと，実証主義を重視するColombia大学のGlasserが仮説検証偏重の社会学研究に対抗して,共同して考案した新しい実証主義的質的研究法である。また，Husserlの現象学の影響を受けたGarfinkelによるエスノメソドロジーからの批判で，これを具体化した会話分析（そして談話分析）が挙げられる。

4. 質的データ分析における共通作業とは？

質的データ分析には，先に紹介した，エスノグラフィー，内容分析，GTA，会話分析，談話分析の他にも，分析的帰納法，物語分析（ナラティブ分析)，ドキュメント分析など多くの分析法が開発されている（パンチ,2005;鈴木,2006)。しかし，分析法をその具体的な分析手順やその根底にある発想という点を中心に詳しく検討してみると，10点の共通部分にまとめらる（佐藤,2008)。すなわち，（1）データの収集と分析の同時進行，（2）分析作業の体型性と柔軟性，（3）分析メモの重要性，（4）文脈性を前提にしたデータのセグメント化，（5）コーディングにおける帰納的な性格，（6）根本的方針としての比較，（7）カテゴリ設定の柔軟性，（8）分析プロセスの折衷性，（9）「アー

ト」としての性格，(10) 最終的な目標としての高次の統合，である。質的データ分析を具体的に理解してもらうために，共通部分を抽出した汎用性の高い分析手順を説明する。詳細な手順は既に幾つもの優れた解説書（例えば，佐藤，2008）が出版されているので，量的データ分析法との比較を通して概略を説明する。

量的研究家が質的データ分析を学習する際の戸惑う要因として，分析作業の「幅の広さ」が指摘できる。量的データ分析法は，分析対象となるデータを整理して分析を開始させれば，誰であってもほぼ同じような過程を辿り，ほぼ同じような結果になるという意味で自動的・固定的であり，いわば「幅の狭さ」が作業の特徴となる。実際，手順が自動化・固定化されているため，量的データ分析家はSPSSなどの統計コンピュータ・ソフトを使って比較的容易に分析を行える。これに対して質的データ分析では，作業過程の一つ一つに分析者の研究意図が入り，分析者によりその内容も結果も異なる。質的データ分析が実行できるコンピュータ・ソフト（例えばMAXqdaなど）が開発されているが，その役割はあくまでも分析支援であり，分析活動のメインは研究者である。ただし，より良い分析を行うためのセオリーは開発・洗練化されている。

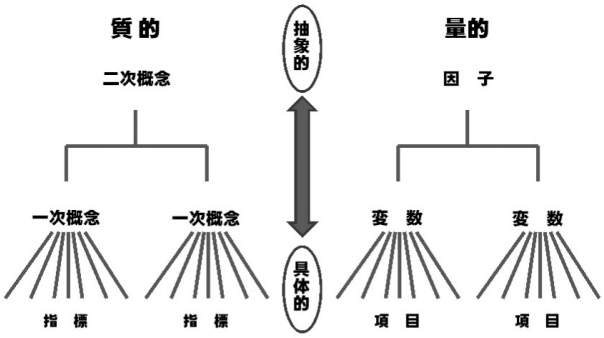

Figure 1　**データ分析における抽象化のレベル（パンチ，2005）**

とはいえ，量的データ分析と質的データ分析は作業手順として共通部分も見られる。例えば，Figure 1には質的／量的データにおけるデータ構造が示されているが，「指標」と「項目」，「一次概念」と「変数」，「二次概念」と「因子」と名称（およびその特性）は多少異なるが，構造は同じである。よって量的研究家は既有の量的データ分析法の知識を先行オーガナイザーとして使い，比較しながら質的データ分析法を学ぶことが有用である。

量的／質的研究法の区別に関係なく，研究とは検討すべき概念を核としながら，統合と分析を繰り返していく行為である。概念はデータ収集においては「何に注目するか」の分析視点を導く。量的研究法では，その視点が事前に研究者によって決定され，測定項目としてデータ収集を行う。測定項目に対する協力者の回答（量的データ）が変数となり，さらに複数の類似した変数をより抽象度の高い因子としてまとめることが多く，これが概念に相当する。心理学研究においては，分析対象となる概念は一つの項目で測定できるとは考えられていない。例えば，外向性概念を調べる場合，「あなたは積極的に人に話しかけますか」という対人領域に関する1項目だけであると，その他の

「あなたは積極的に仕事に取り組みますか」という仕事領域における外向性を見逃してしまう。ゆえに一つの概念を測定する場合，通常は多数の測定項目を用いる。こうして因子が複数抽出されていき，次の段階として，複数の因子の間にはどのような関係性があるのかを調べることになる。このような量的データ分析の分析手順から類推すると，質的データ分析も基本的には，（1）分析対象となる概念を決定する，（2）複数の概念の関係性を検討する，という2段階の分析を行うことになる。ただし，量的研究法ではこの段階が直線的であり前段階に戻らないが，質的研究法では直線的ではなく，2つの段階を何度も往復しながら，緩やかに段階を進めていくことになる。

最初は概念決定の段階である。観察法や面接法など色々な手段を採り，質的データが収集されたところから始める。研究者によりデータのどの部分に焦点を当てるか，どのような認識論で分析を行うかに違いはあるが，必要な注釈が加味された文章データが用意される。最終的に研究成果は紙媒体で報告されるので，映像などの非言語的情報であっても文章化されなければならない。会話分析・談話分析などでは，どのような仕方で会話がなされたか，会話のタイミングや仕草などの情報も特殊な記号を用いた注釈として文章データに盛り込まれる。

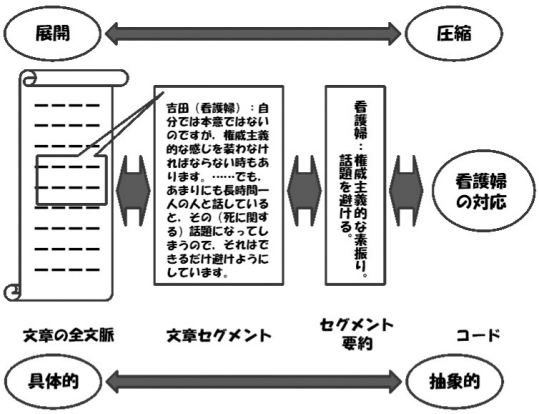

Figure 2　**文字テキストの「圧縮」と「展開」（佐藤，2008）**

質的データ分析における概念決定の基本はFigure 2に示されているように，「展開／具体的」と「圧縮／抽象的」を適宜往復しながら，最終的に「圧縮／抽象的」の方向に向かう。圧縮／抽象化する理由は大きく二つある。一つは脱文脈化を行い，他の事例にも一般化できるような概念を生み出すためである。データ収集時には具体的事例・文脈情報が付与されているが，他の事例・文脈にも一般化するためには不必要な脱文脈化を行い，情報を整理しながら分析視点（概念）の決定を行う。もう一つの理由は，一つは処理のしやすさが挙げられる。人間の処理容量には限界があるため，分析対象が小さいほど処理を行いやすい。Figure 2ではコードを最終段階にしているが，複数の類似した「コード」をさらに抽象化した「高次コード」も考えられる。「高次コード」を含めた「コード」こそが「概念」に相当する（なおFigure 1で使われる用語に違いはあるが，その意味するところは同じである。指標が最も具体性が高い「文章セグメント」などに相当し，一次概念／二次概念が抽象性が高い「コード」に相当する）。なお，佐藤（2008）はこの一連の作業を，新聞や雑誌から

特定の記事を切り抜きスクラップブックに貼り付けていく作業にたとえている。

質的研究法が陥りがち問題点として，事例の特殊性に捕らわれて一般的なパターンを見失ってしまう傾向や小数の事例に基づく過度の一般化という傾向が挙げられるが，これを避ける具体的な工夫として佐藤（2008）は「事例－コード・マトリックス」を推奨している。Figure 3 で示す通り，事例を横軸，コードを縦軸にしたマトリックスの各セルの中に分析対象となるデータを投入する。最初の段階は「文章セグメント」を投入したセグメント版マトリックスを作成し，圧縮／抽象化を行い，セル内を「セグメント要約」に変換していき，要約版マトリックスを作成する。ただし，マトリックスは常に修正されていき，時にはコードそのものを変更しなければならないので，実際の分析に於いては試行錯誤としてのマトリックスが多数作成さることが予想される。なお，ここでいう事例とは量的研究法における研究参加者とはいささか異なる。確かに，参加者Aは事例１，参加者Bは事例２のように参加者と事例をほぼ同じ意味で捉えられるが,同じ人物が異なる事例として分類されることもある。何かのイベントがあり，その前後で参加者の行動・思考パターンが変わった場合，イベント前後で別事例と考えて，イベント前を事例１，イベント後を事例２として分けて分析をすることもできる。量的データ分析における「対応なし／対応あり」「被験者間／被験者内」要因の区別が厳格ではない点が特徴としてあげられる。

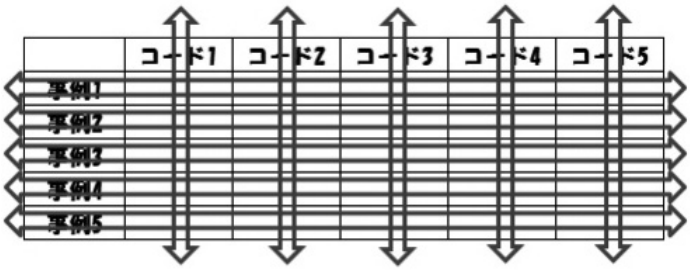

Figure 3　事例－コード・マトリックス

「(高次）コード」としての概念が決定したところで，次の段階，複数概念の関係性の検討に移る。概念間の関係として，無関係，相関関係，因果関係の３種類が想定できるが，どの概念間にどの種類の関係性が当てはまるかを考察するが，一般的には「物語化」による関係性の再構築を行う。これまで圧縮／抽象化の方向で作業を進めていたが，関係性を検討する段階では，展開／具体化の逆方向で作業を進めていく。量的データ分析であれば，関連がある変数（要素）は高頻度で同じ反応を返すという頻度の法則を使った分析を行える。しかし，質的データ分析では統計学的な頻度の法則を使わず，分析家がデータとの取組みの中で構築した物語によって，コード（概念）間の関係性を規定していく。また，多くのコードがある場合には，その中で中核となるコードを設定して，それを中心に関係性の検討を行うのが通例とされる。

5. 種々の質的データ分析法の違いは？　ー内容分析とGTAを例にしてー

2変数の量的データの類似性を調べる場合,Pearsonの積率相関係数とSpearmanの順位相関係数が使われることが多い（森・吉田,1990)。両者は，一般的に収集された量的データが，間隔尺度とみなせれば前者を，順序尺度とみなせれば後者を使うことになっている。計算方法の観点からは，Spearmanの順位相関係数は順位化の変換を施した対象データにPearsonの積率相関係数の計算法を適用する点させることで導かれるため,「順位化」の有無が相違点として挙げられる。しかし，心理学研究においては必ずしも対象データがはっきりと間隔尺度か順序尺度かに区別できるとは限らず,しばしば量的研究家は自分の研究の目的と精度に応じて，どちらの相関係数を使うかを意図的に選択する。逆に言えば，研究報告でSpearmanの順位相関係数を使ったと宣言する場合，順位化の制約条件を守らなければならない。このように量的データ分析の場合，個々の具体的な分析法には様々な前提条件（制約）が設定されている。

それでは種々の具体的な質的データ分析法を行ったと宣言するためにはどのような前提条件を守る必要があるのか。先に説明した共通作業にどのような制約（あるいは修正）を課すことにより，例えば，内容分析，GTA，会話分析，談話分析，物語分析などその他の分析法を含めて，固有の分析法を行ったと宣言できるのか。この問いには，各分析法の差異点を探求する過程で回答が得られると思われる。ここでは，質的データ分析の中核作業であるコード設定に関連して対称的であり，また，適用範囲の広い分析法である内容分析とGTAを取り上げる。

コード設定は非常に重要な過程だが，設定方法に関連して「理論からはじめるか，実証からはじめるか」(佐藤,2008）という議論がある。研究には分析視点の設定が必要であることは既に述べたが，量的データ分析の場合はデータ収集の前段階において，理論的に設定された視点を「測定項目」として採用している。この設定方法は理論から導かれており,「演繹的コーディング」と呼ばれる。対照的に，質的データ分析法で広く採用されている設定法が「帰納的コーディング」と呼ばれる方法であり，予め用意された枠組みを使うのではなく，収集されたデータから浮かび上がるコードを用いる。いわゆる「データそのものに語らせる」(ただし，何の枠組み／理論もなく認識することは困難ではないかという指摘もある)。

演繹的コーディングを用いる質的データ分析法の代表格は「内容分析」である。鈴木（2006）によると，Berelsonの「内容分析は，コミュニケーションの明示的内容の客観的，体系的かつ数量的記述のための調査技術である」という定義は有名であるが，その他にも無視できない違いを示す定義も多い。しかし，それらの定義の共通点として，客観性（複数の研究者が同じ素材から同一の結論を導けるような定式化された規則を用いる)，体系性（分析対象の素材やカテゴリの取捨選択は首尾一貫して適用される体系的な選択基準に従う)，一般性（分析対象の単なる記述ではなく，理論的な意味を持った結果を得る）の3つが挙げられるが,「明示的内容に限定するか」と「数量化の有無」については意見が分かれる。このため数量化の有無の観点から,「量的内容分析」(佐藤,2008）と「質的内容分析」（フリック,2002）とに区別される。ただし，実際に数量化を行うかどうかに関係なく，

客観的事実を検討し，一般法則を追求する量的データ分析法と親和性が高い点は共通する。

帰納的コーディングを採用する分析法の代表格はGTAであり,帰納的コーディングが質的データ分析法の基本方針であることを考えると,GTAこそが質的データ分析法の一般的方法論と位置づけることができる。そもそもGTAは,人間と人間が直接的にやり取りをする社会的相互作用に関わる研究の中で誕生した研究アプローチであり，質的研究法を重視するStraussと量的研究法を重視するGlasserという異なる立場の二人による絶妙なバランスを保った共同作業から考案された方法論である。その研究態度の違いからか，GTAに対する両者の違いが対立を生み，分裂していき，現在ではGTAには色々な種類がある。木下（2007）によると，オリジナル版GTA，Strauss-Corbin版GT，Glaser版 GTA，修正版 M-GTAが代表的なものとされる。

どの種類のGTAもコード設定法において重大な差異が見られる。そもそものオリジナル版 GTAはコード設定法の具体的詳細が明確ではなかったため，StraussとGlasserはそれぞれの立場からその明確化を図ることになる。Glasserは何よりもGTAが仮説検証偏重に対抗して作られたという原点の分析思想にこだわった。そして質的データ分析法とは分析手順のある程度のガイドラインは示せるものの，コード設定法の具体的マニュアル化は本質的ではなく，究極的には分析者の解釈能力を洗練化することが重要であるとした。対照的に，Strauss（およびCobin）は分析思想へのこだわりはあまりなく,GTAをより普及しやすいように改変していくことになる。例えば,具体的なコード設定法の具体的手順をマニュアル化することで適切な解釈やコードが生成できたり，あるいは,（本来質的データ分析法とは相性が良くない）演繹的コーディングを採用することも構わないとした。このようにオリジナル版GTA考案者自身の２人による補足が対立する中で，木下（1999）は２人の意見を批判的に取り入れながら,「研究する人間」という分析者の役割を重視し，オリジナル版GTAへの独自の補足を行ったとする修正版 M-GTAを提唱した。ただし，このように幾種類のバリエーションがあるものの同じGTAである以上共通する部分もある。木下（2003）によると，GTAを行ったと宣言できるための共通要素とは,（１）データに密着した分析から独自の理論を生成する研究法,（２）コーディング方法としての「オープン・コーディングと（軸足・）選択的コーディング」,（３）基軸となる「継続的比較分析」,（４）その機能面である「理論的サンプリング」,（５）そして分析の終了を判断する基準としての「理論的飽和化」の５点を，GTA宣言の不可欠の条件として設定している。

以上を踏まえて,内容分析とGTAの制約となる前提条件をまとめてみる。量的内容分析とは,収集された質的データに対して，理論的に導かれたカテゴリの観点から数量化を行い，変換された量的データに対して量的データ分析を行う研究法と定義できる（よって，ほとんど共通作業の過程を利用しない)。最近注目されているテキスト･マイニングも同じ種類の分析法といえよう。一方，質的内容分析を行う場合は，既に説明した質的データ分析の共通作業を利用することになる。ただし演繹的コーディングを用いるため，事前に研究テーマに対する綿密な理論的検討をする必要がある。また多くの質的データ分析法が仮説生成型であるのに対して，この方法では仮説検証型の要素が強く，事前に設定されたコードで収集された事例データを適切に説明できるか，設定コードの妥当性を検討する側面もある。そしてGTAを行う場合は基本的に質的データ分析の共通作業として説明し

た手順を踏むことになる(そもそもGTAの分析手順こそが質的データ分析の基本であるという立場を本稿では採用している)。

本稿では，特に作業手順を中心に，量的研究法と比較しながら質的データ分析の概略を説明し，量的研究家がこの分析法を学ぶ際のガイドラインとなるものを提供した。しかしこのガイドラインに沿った学習を進めたとしても，次なる疑問が浮かぶだろう。なぜ質的データ分析が検討しようとする「行為者の意味」を研究しなければならないのか，と。研究態度の説明において簡単に触れたが，量的研究家の多くは実証主義を採用しており，心理学分野の量的研究家は「人の行動は『観察可能な客観的事実』によって説明可能である」という認識のもとで研究を進めることになる。しかし，この認識に対して，「人の行動は『行為者の主観的な意味世界』からのみ説明可能である」とする象徴主義的相互作用論からの反論がなされた（ウォーラス & ウルフ，1985)。この象徴主義的相互作用論が GTA，すなわち質的データ分析を誘発したことを考慮すると，質的データ分析をより深く理解するためには，認識論という哲学分野の学習を次の段階として設定する必要がある。

引用文献

ウヴェ・フリック　2002　小田博志・春日常・山本則子・宮地尚子（訳）　質的研究入門―「人間の科学」のための方法論　春秋社（Flick, U. 1995 *Quantitative Forschung*.）.

本間康平・光吉利之・田野崎昭夫・塩原勉（編）　1988　新版　社会学概論―社会・文化・人間の総合理論　有斐閣.

木下康仁　2003　グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践―質的研究への誘い　弘文堂.

木下康仁　2007　ライブ講義 M-GTA 実践的質的研究法 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて　弘文堂.

J・マクレオッド　2007　谷口明子・原田杏子・下山晴彦（訳）　臨床実践のための質的研究法入門　金剛出版（McLeod, J. 2000 *Quantitative Research in Counselling and Psychotherapy*.）.

森敏昭・吉田寿夫　1990　心理学のためのデータ解析テクニカルブック　北大路書房.

K・F・パンチ　2005　川合隆男（訳）　社会調査入門　量的調査と質的調査の活用　慶應義塾大学出版会(Punch, K. F. 1998 *Introduction to Social Research: Quantitative & Qualitative Approaches*.）.

佐藤郁哉　2008　質的データ分析法―原理・方法・実践　新曜社.

鈴木裕久　2006　臨床心理学研究のための質的方法概説　創風社.

C・ウィリッグ　2003　上淵寿・小松孝至・大家まゆみ（訳）　心理学のための質的研究法入門―創造的な探求に向けて　培風館(Willig, C. 2001 *Introducing Quantitative Research in Psychology: Adventures in theory and method*.）.

R・A・ウォーラス & A・ウルフ　1985　濱屋正男・藤原孝・寺田篤弘・八幡康貞　現代社会学理論　新泉社（Wallace, R. A. & Wolf, A. 1980 *Contenporary Sociological Theory*.）